

小田原教育

第110号

平成21年3月17日



ヤマリソウ

ヤマリソウは本州福島県以南から九州に分布する多年生の草本。沢ぞいのやや湿った場所に好んで生え、4月から5月にかけて、直径1cmほどのり色の花をたくさん付けます。和名は山瑠璃草で花の色に由来します。ワスレナグサと同じ科です。

目 次

巻頭言

「言葉の大切さを思う」

小田原市教育研究所運営協議会委員長 2

1 小さなころみ

①「小・中連携で取り組む不登校対策」

「不登校対策」に関する研究員 3

2 学びの架け橋

①「伝え合う力を高める指導の工夫～表現力の向上をめざして～」

国語 プロジェクト研修員 4

②「小・中学校における算数・数学指導の連携をめざして」

算数・数学 プロジェクト研修員 5

③「心に響き、心が動く道徳授業の実践」

道徳 プロジェクト研修員 6

3 教育相談の現場から

「聞くことの大切さ」

教育研究所教育相談員 7

4 ある教室から

「心をかよわせて」

学校教育課指導主事 8

7 研究所だより

教育研究指導主事9・10

「言葉の大切さを思う」

小田原市教育研究所運営協議会

委員長

最近若者が、単語だけで会話している状況をよく見かけます。時には、よく分からない略語のような言葉を使っています。仲良く会話をしているように見えますが、本当に理解し合っているのだろうか、将来の日本人の言葉事情を考えると不安を感じてしまいます。

先日、授業の中で、「先生、はさみ。」という子ども、「先生は、はさみではありません。」と返事をする先生、「先生、はさみを忘れましたので貸してください。」と言い直す子どもと先生の会話を耳にしました。

子どもが何を言おうとしているのか分かりますが、敢えて言い直させた先生の指導はすばらしいものです。最後まではっきりと話すことによって、気持ちが相手に通じます。丁寧に話すのではなく、当たり前のことであるという認識が大切です。

言葉は、主語と述語を基本とし、それをどのように修飾するかでその人らしさが表現されます。修飾した言葉の工夫は、心の状況を表します。相手を意識した、温かい工夫でありたいと思います。

今年度本校では、「あいさつ」について、1年を通して取り組む提案がされました。数日後「あったかあいさつ」というカラー刷りの看板が、各学級や校内の掲示板に掲げられました。あいさつの前に「あったか

という言葉がついていることに、とても感動したことを覚えています。「あったか」とつけた担当の意図や思いが、強く伝わってきました。

あいさつに、修飾語が付いただけで大きくあいさつの内容が変化します。温かいあいさつとはどうあるべきか、読んだ人は考えます。分かりやすく伝えるための工夫がされ、伝え手の気持ちが良く伝わる表現であると思います。

人は、人・こと・ものとの関わりの中で、感じたり考えたりしたことを言葉で表現し、伝え合ったり・確かめ合ったりして理解を図っています。言葉は、人間が共に関わり合い生きるためにとても重要な道具です。この道具なしでは、何もできません。

子どもたちには、この道具を上手に使い、多くの人々と関わり合いながら、豊かに感じたり、正しく判断したりして、自信を持って行動し、様々な教育活動に意欲的に取り組んで欲しいと願っています。

そのための教職員の日々の研鑽は、必要不可欠のものであり、指導力の向上は、子どもたちの成長と共にありたいものです。





小・中連携で取り組む不登校対策

「不登校対策」に関する研究員

「小田原市の喫緊の課題である不登校問題に対応していくために」本年度新たに「不登校対策に関する研究」が2年計画で立ち上げられました。

研究メンバーは、酒匂中学校区・千代中学校区からそれぞれ小学校教員2名、中学校教員1名ずつの計6名です。研修会などで顔は見知っているものの、胸襟を開いて話しができるというほどの仲ではないので「小学校の時には登校していたのに、どうして中学校に行くとな登校になるのだろう」「明らかに支援が必要なのに、なぜ小学校では具体的な手立てがなされていなかったのだろう」などの様々な思いを直接口に出すこともできず、まずは研究の方向性について協議しました。

これからの不登校対策に必要なのは、具体的な実践例であると考え、①各校でできることとその実践例（未然防止例・復帰例）②小・中連携でできることとその実践例を2年後に冊子やリーフレットにまとめることを目標に取り組むこととしました。

現状分析から始めようということで、小学校・中学校の不登校に関する情報交換をしたあとで、不登校に関連する要因を学校・家庭・本人の視点から探り、そこから解決に向けた手立てや方向性を話し合いました。

「小学校では、学級担任や学級の仲間が児童の特徴をよく理解し、その子がうまく生活できるように周りが配慮をしている」

「中学校では複数の小学校から集まることによる新しい人間関係に加え、教科ごとに教科担任が変わり、時間に追われる生活がいかに生徒の負担になっているか」ということなどが浮き彫りになりました。

「体育の授業では複数クラスが合同で種目選択により授業が行われる」ということに小学校の先生が大きな驚きを示し、いわゆる中1ギャップと言われていることを、教員も実感することができました。当たり前のことですが、小学校と中学校との生活の違いを知ること、昨日まで小学生だった子どもが急に中学生として変わるわけではないと理解することの大切さを確認しました。最終目標は「社会的に自立する」という軸を見失わないことが一番重要だと考えます。

今後は学校で取り組める継続可能な不登校対策を検討し、実践することがわれわれの課題となります。来年の今頃の冊子の完成に思いを馳せると、時間は短いけれど長い道のりです。

毎月の研究会の終了後、いつまでも話しが終わらない6人の研究員の姿こそが小中連携の成果と言えるのではないのでしょうか。



伝え合う力を高める指導の工夫

～表現力の向上をめざして～

プロジェクト研修員（国語部会）

今年度は「伝え合う力」と間口を広げ、表現力全体の向上をめざして取り組んだ。特に「根拠を持って自分の考えを持ち、人に伝わるようにする」力をつけていきたいと考えた。

1. 公開授業提案

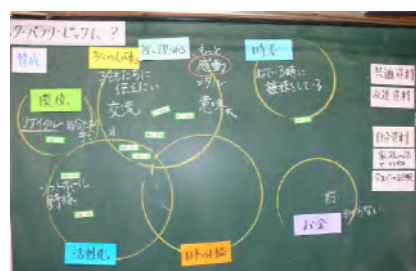
5年「伝え合って考えようその2～2016オリンピック・パラリンピックはどこで？」

根拠を持ってまず自分の考えを持つこと、また人の意見をどう取り入れられるかを大切にしたい。そのために相手の伝えたいことを正しく理解し、相手の思いを感じ、受け止めようとするのがよりできるようにしたいと考えた。

テーマに迫るための手立ては、

- ①いろいろな視点や立場を知る資料の提示
 - ②資料を読み取り、考えを整理しやすくなるための付箋、マーカーの使用
 - ③考えを整理し、はっきりさせるためのワークシートやネームプレートの使用
- である。単元の始め・中・終わりで三度、今自分の考えは何か、誰の意見や資料で考えが変わったかを足跡としてワークシートに記入させた。友達の意見から揺さぶられ、変わったり広がったりする変容が分かるように、本時も始めと終わりに、今自分の考えはどこかをネームプレートで示し、変化が見取れるようにした。様々な視点から意見交換ができる題材として適切で、共通資料・自分資料・友達資料の準備や提示の工夫がなされ、資料をもとに根拠を持った話

し合いができ、ねらいが達成できた。友達の意見を聞き、自分の意見に取り入れ、考えを広げることができるようになってきている。



2. 小・中連携を生かす取り組み

中学2年で、同じ題材（2016 オリンピック・パラリンピック招致）で意見文を書く学習を行った。

東京での開催に賛成・反対の二つの説明的文章を読み比べ、指定された形式で自分の意見と反対の意見文に対して反論を書き、自分の意見を表明するというものである。それぞれの主張を読み取ってその根拠を知ろうとし、引用することがポイントである。どこに納得がいかないのか等、引用した部分に関しての自分の主張を書かせることで、説得力あるものにすることができた。タイムリーで関心の高い話題であり賛否の考えをまとめやすく、意見文の題材としてもよかった。

報徳小の授業提案前に実施し、提示する資料によつての賛否の傾向を知ることができた。中2の書いた意見文を小5の指導に生かすのは難しくできなかったが、逆なら可能なので、今後も小・中の連携を図る取り組みを探っていきたい。



小・中学校における算数・数学指導の連携をめざして

～図形領域における算数・数学的な活動を通した指導方法の工夫～



プロジェクト研修員（算数・数学部会）

今年度は研究の１年目であるが、諸調査の分析から中学生が苦手とする分野の一つとして図形分野があげられた。そこで、そのつまづきや定着しにくい原因を、小・中学校の連続した学びの中からとらえ、図形の見方や考え方を豊かにできる有効な方法を研究テーマとした。主な研究の内容は次のようである。

＊小６，中１，中３対象の調査

それぞれの学年において、図形に関する既習内容における調査を行った。各学年の正答率からみると、中学校３年生は、中学校１年生において空間図形の学習をすることで学習の定着化、深化がなされたと見ることができた。さらに中学校３年生は、中学校１年生よりも体積を求めるにあたって、図形を分割したり補ったりして立体をとらえる見方ができることもわかった。これは、中学校１年生で立体の切断について学ぶことにより、空間図形の見方、考え方が豊かになったととらえることができた。

＊算数・数学的な活動を取り入れた指導方法

算数・数学的な活動を授業に取り入れて指導していくことは、図形の見方・考え方を豊かにできる有効な方法であると思われる。そこで、これを取り入れた授業の実践例を考えた。図形においては、観察や操作や実験などの活動を通して直感的な見方や考え方を深められるような教材を工夫した。

＊算数・数学的活動を取り入れた公開授業

「体積のはかり方と表し方」（小学６年）という単元の公開授業を行った。量を計算によって求めることも重要であるが、空間図形を認識させる単元でもあると考え、単に答えを求めるだけでなく、図形の見方・考え方を豊かにするための機会ととらえた。

そこで、算数的活動ができる場としてヒントコーナーを設置し、手にとって操作できる立体模型を置いたり、スポンジ製の模型を自由に切断できるようにしたり、補助線を書き込んだカードを用意したりと思考に幅を持たせる工夫にあふれた授業であった。児童は実感を持って空間図形の体積を求めており、学習意欲も高まり、発展的に考えていた。楽しそうに児童が課題に取り組んでいる姿を通して、算数的活動の良さが参観者にも伝わったと思われる。

＊小・中学校における空間図形の系統図

算数・数学では学習内容の系統性が明らかであるため、小・中学校のスパイラル的な指導ができるように、新学習要領をふまえた系統図を作成した。このような系統図を作ることによってそれぞれの学年における既習内容と未習内容がわかり、連続した学習へ繋げることができると思われる。

本年度は１年目ということで、連続性を踏まえて、図形領域を扱った。特に空間図形では、小・中学校の連携を深め、算数・数学的活動を取り入れた指導方法についての研究を進めた。

心に響き、心が動く道徳授業の実践

プロジェクト研修員(道徳部会)

社会が大きく変化し、それに伴って価値観も多様化している今日、心豊かにたくましく生きる子どもたちを育成するため、道徳の時間の重要性がますます強調されている。そのような状況の中で、子どもたちの心に響き、心を動かせるような道徳の時間をどのように実践していくか、道徳のプロジェクト研修員4人で研究を進めてきた。

この1年間、様々な指導過程で子どもたちの実態などに応じて、多様かつ弾力的な指導を実践してきたことを紹介したい。

(1) 子どもの心を揺さぶる資料の活用

資料を探す際には、学級の実態に即したものの、なるべく子どもたちと同年代の話を選ぶように努めてきた。

「力のある資料」の提示は、児童の興味・関心を引きやすく、素直な気持ちで取り組みやすかった。行動面だけでなく、心情面にうったえかけるような資料は、学級全体の雰囲気も高まっていく。資料においては、教育研究所のホームページにある自作資料をダウンロードしたり、実際に自分で資料を作成したりもした。自分で資料を作る際に、特に留意した点は、自分の体験をもとにすることや人の生き方が表れるような表現をすること、ストーリー（基本指導過程に基づいたもの）を端的にまとめ、長文にならないようにしたことである。

(2) 一人ひとりの思いを大切にす道徳の時間の工夫

道徳の時間における価値を深めるためには、子どもの実態を的確に把握し、題材を選択しなければならない。

今回、中学2年生の学級での授業実践においては、阪神大震災で避難所になったある中学校での出来事を扱った。同じ中学生

であるという目線で思いを共有するとともに、「自分が今できることは何か」を考え、自分が地域社会にとって大切な存在であることを実感できるような指導過程を作成してきた。当時の生々しい映像を使って、少しでも自分に置きかえて考えさせるとともに、自分にできることを付箋やネームカードを利用し、一人ひとりの言葉や思いを大切に扱ってきた。やはり個の思いを生かすためには、一人ひとりが自分と見つめ合い、自分の思いを言葉にすることが大切であると感じた。

(3) 人材を活用した授業実践

人材を活用した指導過程では、副読本を使った授業とは違う、迫力や言葉の重さ、真剣に生きている姿などを直に感じ取ることや、子どもたちの道徳的価値観を揺さぶることができた。人材活用の場面だが、主に終末での直接的な人材活用に絞ってみた。

授業の終末は、担任による説話も子どもの心に響き効果的であるが、すべての価値について心に響く説話をするのは難しい。そこで終末の話を担任以外の校内人材をはじめ、地域の方々や保護者にも依頼してみた。そうすることで、子どもたちも新鮮な気持ちで話を聞くことができ、一層実践への意欲化が図られた。大事なことは、講師の方との事前の打ち合わせをきちんと行い、授業のねらいや授業の中の講師の出場、話の内容、時間などについて授業者の意図を確実に伝えておく必要がある。

今後も子どもたち自身が主体的に価値に気づき、価値を深めることによってさらに道徳性が高まるように日々の道徳の時間の実践を大切にしていきたい。



聞くことの大切さ

教育研究所教育相談員

教育相談員になって、ほぼ1年が過ぎました。相談員になった時、かつて訪問相談員を経験され、多くの不登校児童・生徒を学校復帰させた方とお会いする機会がありました。相談の秘訣を伺いますと①親の話を何時間でも聞く、②学校の立場に立たない、の2点でした。

①について、私たちは保護者から不登校の相談があると、その状況を聞きます。例えば不登校になったきっかけ、学校がある日と土・日の違い、身の回りの様子、昼夜逆転はないか等です。相談員になった頃、できるだけ状況を掴もうとする余り、つい質問調になっていました。本当は、子どもが不登校になった心配や不安、どうしたらよいのか等、悩んで悩んで相談に来られた気持ちを汲みとり、良く聞くことが大切なのに、です。「親の話を何時間でも聞く」この言葉の重さを身にしみて感じています。

②について、保護者からは「先生も心配して家庭訪問や電話をいただき…」という声を多く聞きます。ただ、「もう少し何か…」という期待も言外に感じとれます。このようなとき、学校の取り組みが分かっている分、つい「学校も頑張っているんですよ」という言い方をしてしまいます。「学校の立場に立たない」は、保護者の立場になって、学校に期待されていることを良く聞き取る。そして、保護者の了解を得たうえで、学校と今後の手立てを考え実行することのように思います。

上記2点は、不登校児童・生徒と相談活動を進めるうえでも、共通することがあり

ます。特に、聞くことの大切さは感じます。

例えば、不登校傾向の中学生について相談を受けたことがありました。原因がはっきりしない中学生でしたが、良く話を聞いていると原因の中に部活動にからむ人間関係が見えてきました。学級担任のとき何度か経験した相談です。先に見える内容でしたので少し余裕を持って話を聞くことができましたし、相談にのることもできました。その後、登校している事を聞き、嬉しく思っています。

次に、子どもの立場や状況を捉えて相談活動を進めることの大切さです。

不登校の子どもに対して、何とか夏休み中に登校のきっかけを掴もうと考え、最初に学校巡りを計画したことがありました。結果は、思うような動きは得られませんでした。学校探検や校門までの通学体験は登校に結びつく有効な方法として成果が上げられていますが、子どもの状況を十分に掴まないまま急いで進めたためスタートでつまづいてしまいました。

その後、訪問相談を行い子どもの状況を把握したうえで保護者・学校と一緒に話し合い、どう取り組んでいくかを決めました。そして、学校が用意した活動メニューで楽しい体験を積み重ね、子どもは元気になりました。

昨日より今日、今日より明日と結果を求めたくなります。相談活動は「聞いて、聞いて」と繰り返された先達の言葉が、とても有り難く感じています。





心をかよわせて

学校教育課指導主事

「お手紙を読み終わった後、どんなことを思いましたか」

いつもなら大好きな先生の話を中心に聞いている子どもたち。でも、このときばかりは先生の話をよくよそに、手紙をくれたお母さんの方を向いて微笑み、また手紙を読み返しています。そして、もう一度大好きな大好きなお母さんの方を見て微笑んでいます。

初夏の風が感じられるその日、たくさんの保護者に囲まれた 1 年生の教室で“いのち”の学習が行われました。小学校に入学してまだ 3 ヶ月しか経っていないというのに、1 年生がしっかりと挙手しています。それも一人や二人ではありません。クラスのほとんどの子が一斉に挙手しています。そんな姿を見ながらワクワクしている私がいることに気がつきました。どこからこの活気が生まれてくるのだろう。その要因を探ってみました。

その一つに保護者からの手紙がありました。一人ひとりが思い思いに読みながら、資料から離れて自分の存在について考えています。お母さんの方をちらちら見ながら手紙を読む子。読んでは封筒にしまい、また封筒から出して読んではまたしまう。「大好きって書いてあった。」

「宝物だよって書いてあった」「お母さんが思ったより優しかった」と感想を述べます。それぞれの子が手紙を感じ、言葉にしなくても、その思いを表情や態度でおうちの人に伝えています。これもひとつのコミュニケーションであると感じました。子どもは深く学びたいという願いを持っています。教材との出会わせ方を

工夫することで、子ども一人ひとりが心の底から感じ、自らに問いかけ、自己への気づきを促していました。

また、その自己の学びを共有できるように、話し手をしっかりと見て聞く姿勢が育っています。きちんと話を聞いているから発問に対してもしっかりと反応できています。このように、思い思いに自分の考えを述べられるということは、まず第一に教師との信頼関係が成り立っているからではないでしょうか。

さらに、教師の継続的なみとりが、話す力に個人差がある子ども一人ひとりに対しても、それを補える上手な発問を可能としています。その補助発問がそれぞれの経験を上手に想起させることへとつながっており、子どもの考えをより広く、より深くするための効果を生んでいます。子どもが今までにどんな体験してきたかということを教師がきちんと把握し、それを上手に想起させてあげたことによって、子どもたちは意気揚々と自分の経験を話すことができました。それは聞く側にとっても興味深いものとなり、こういった経験の繰り返しが話し手・聞き手を育ててきているのです。

子どもに寄り添った話題（学習課題）、子どもと教師の信頼関係、授業を進める上での授業力（指導意識）、これら 3 つのバランスが質の高い授業には重要です。子どもに寄り添い過ぎても、指導意識が強すぎても子どもと教師の両者が納得のいく授業にはなりません。また、何よりも信頼関係という強いつながりから日々の授業が成立していくのではないのでしょうか。



研究所だより ～研修事業より～



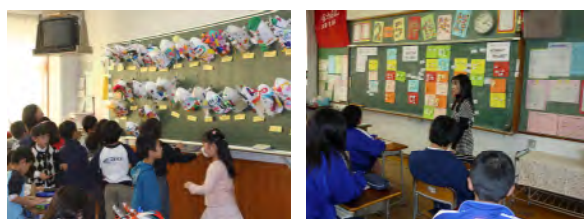
教育研究所研修事業の今年度の取り組みを紹介します。明日の教育活動につながる充実した研修をめざし、先生方にご活躍いただきました。



☆☆プロジェクト研修公開授業☆☆

プロジェクト研修各部会の公開授業が右表のように行われました。多くの先生方に参加していただき、ありがとうございました。また、研修員の先生方にとっては、研究一年目の公開授業ということで、難しい点もあったと思いますが、公開授業での研究成果の発信にご協力いただきました。

今年度の研究報告もまとめていただきましたので、ぜひご覧下さい。



プロジェクト研修公開授業一覧

教科等	月日場所	授業者	内 容	参加
国語	1/23 報徳小		2016 オリンピック パラリンピックはどこで？	23名
社会	11/26 酒匂中		戦争と国民生活	16名
算数 数学	11/25 桜井小		複合図形の体積を求める	17名
理科	10/28 国府津中		遺伝子組み換え作物	11名
図工 美術	12/3 三の丸小		へんしん	11名
外国語 外国語活動	11/21 富水小		数で遊ぼう	21名
道徳	1/21 千代中		私たちにできること	17名

☆☆校内研究担当者研修会☆☆

充実した校内研究を推進するためにリーダーシップをとる校内研究担当の先生方の研修会を今年度も開催しましたが、第2回目をプロジェクト研修公開授業と合わせ、研究協議を活性化させるための研修会としました。参加体験型の研究協議を行いました。授業提案をより良いものにするための協議であるという視点が明確であったため、活発で内容の濃い研修会となりました。

校内研究のさらなる充実のために、リーダーシップをとる先生方の手助けとなる研修となるように、来年度も努力していきたいと思います。





研 究 所 だ よ り



今年度も、研究・研修や教育相談などの所管事業を充実させる運営を心がけました。

◆ 新 着 図 書 の お 知 ら せ ◆

今年度新たに購入した図書の一部です。2週間を原則に貸し出しをしていますので、ぜひご利用下さい。

☆☆学習指導・授業☆☆

「習得・活用・探究の授業をつくる

～PISA型「読解力」を核としたカリキュラム・マネジメント～

横浜国大附属横浜中学校（三省堂）

「新時代の学力形成をめざす授業づくり」

兵庫大附属小学校（明治図書）

「子ども力を高める

授業活用する力、伝え合う力、〇〇科好きを育てる」

筑波大附属小学校（図書文化）

「『教えて考えさせる授業』を創る」

（図書文化）

「活用力を育てる授業の考え方と実践」

（図書文化）

「授業力向上の鍵」

横浜市教育センター（大日本図書）

☆☆小学校外国語活動☆☆

「新しい時代の小学校英語指導の原則」

（明治図書）

「だれにでもわかる小学校英語活動の手引き」

（学事出版）

「小学校英語教育の進め方ーことばの教育として」

（成美堂）

☆☆学級経営／児童・生徒指導／教育相談等☆☆

「データが語る①学校の課題」

「データが語る②子どもの実態」

「データが語る③家庭・地域の課題」

「公立学校の挑戦(中学校)」

人間関係づくりで学力向上を実現する」

「学級担任の特別支援教育

個別支援と一斉指導を一体化する学級経営」

（図書文化）

「教師のための不登校サポートマニュアル」

（明治図書）

「自分とも友達ともポジティブ・コミュニケーション」

（ほんの森出版）

☆☆教職・その他☆☆

「日本の教師再生戦略

ー全国の教師100万人を勇気づけるー」

（教育出版）

◆ 県教育研究所連盟研究発表大会 ◆

10月15日、大和市立光丘中学校で開催されました。小田原市では、平成18・19年度

「幼・小・中生活実態調査に関する研究」について発表していただきました。充実した研究発信の場となりました。

◆ 教育相談指導学級より ◆

今年度、通級生在籍校の先生方には、担任の先生を中心に、学級スポーツ教室等の行事に積極的に参加していただきました。担任の先生が来てくれたという嬉しさが、通級する子どもたちの表情から溢れていました。

通級生の学校復帰をめざして、さらなる連携をお願いします。また、3月は「学校復帰強化月間」として通級生一人ひとりに応じた支援をしていますので、よろしくお願いします。

小田原教育 第110号

発行日 平成21年3月17日（火）

発行所 小田原市教育研究所

発行者 所長 小宮 郁夫

〒250-8555 小田原市荻窪 300

電話 33-1730

研究所ホームページアドレス

[http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/](http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/kyouiku_ken/index.html)

[kyouiku_ken/index.html](http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/kyouiku_ken/index.html)